

ゲーテとバリモント——「超人」と「見ること」——

寒河江 光 徳

はじめに

バリモントという詩人のロシア文学史的な位置づけを考えるに、ロシア象徴主義の先駆者である、と同時に、ニーチェ主義者という側面があることは周知の事実である。

「ニーチェ主義」は、ニーチェ思想の表層的な理解の反映と捉えられるべきものであり、必ずしもそれがニーチェ思想と同一のものと捉えるべきではない。むしろ、既成の道德観、善悪の基準に対する再評価というニーチェの『善悪の彼岸』の中で問題にされる「一切の価値の再評価」から派生しつつも、カメンスキー、アンドレーエフ、アルツイバーシェフの作品に代表される露骨なエロティズムなどに対して、「ニーチェ主義」と言われることが多い。

それに対して、バリモントの作品における、ニーチェが論じられるとき、「超人」思想や「永劫回帰」といったニーチェのより本質的な問題との関連で論じられてきたといつてよい。ニーチェ思想におけるキリスト教的な死生観の問題に対する懐疑的な側面は、バリモントの作品の中にも頻出する、絶対的な唯一神を否定したところにたち宿る、虚無主義、厭世主義を徹底肯定することによって、覚知される「永劫回帰」は、仏教的な「輪廻転生」に近い考え方であり、それ自体がニーチェ思想の独創でないことは論を待たない。バリモント自身、「超人」なる語を使用したのは決してニーチェがはじめてではないとし、その代表的な存在としてゲーテの名前を挙げるのである¹。

「超人」がニーチェの独創的な言葉でないことを強調する言説は、バリモントの「超人」がニーチェ主義的なもの、と同一視されないための戦略的言説との解釈ができる。事実バリモントが好んで用いた「超人」イメージは即ニーチェ思想の影響とされ、ニーチェとの関連でバリモントの「超人」が論じられたことはあった²が、バリモントが用いた「超人」

¹ 随筆「ロマン主義者たち(Романтики)」の中での言及。‘Таково немецкое слово «Übermensch», «сверхчеловек» обычно связываемое с Ницше, но употреблявшееся ещё раньше романтиками и Гёте, и я думаю, раньше, чем романтиками и Гёте, его, например, вполне можно было бы применить к крестьяну-мистику 16-ого века, Якобу Бёме: этот сапожник-философ видел бога в лицо, как позднее его видел английский гравёр, художник и поэт — Вильяма Блейк.’ *Бальмонт К.Д. Избранное. Стихотворение. Переводы. Статьи. М.,1980* 中の「Романтики」, С.556.このような発言をバリモントは、自らのゲーテ論「大地に選ばれし者(Избранник земли)」のなかでも繰り返している。*Бальмонт К.Д. Белые зарницы. СПб.,1908. С.9.*

² たとえば, A.Lane, *Nitzsche in Russia*, Princeton,1986.における論文 Bal'mont and Scriabin: The artist

イメージとニーチェ以前に用いられた「超人」との関連性が論じられたことは、今まで一度もなかった。

本論では、バリモントの「ゲーテ」に関連した言説を整理しながら、ゲーテの作品に頻出し、バリモントも好んで用いた「山々の頂き」(峰)という語と、その言葉に関連して用いた「超人」イメージについて考察し、その関連性を論じてみたい。

バリモントにとっての「ゲーテ」

バリモントがゲーテの作品に親しんだ様子は、バリモントの作品からその片鱗を見ることが出来る。バリモントは自らの作品に自分が読み親しんだ作品のエピグラフをつける習癖があったが、バリモントのきわめて初期の作品に、『ファウスト』の一節が使われていることから、バリモントがゲーテに親しんでいたことは想像に難くない。

ウラジミル・マルコフの指摘によれば、バリモントが1890年初頭につづった詩集の中の「миг (瞬間)」という詩に、早々と『ファウスト』第2部の最後の独白部分がエピグラフとして用いられている¹。この詩集の中身は、バリモントがその後出版した詩集にも載せられていないが、この事実に基づくならば、バリモントのゲーテの作品への傾倒は、後に1900年代に出版された詩集に現れるニーチェに傾倒したよりも早い時期のものであり、バリモントはニーチェ以前にゲーテに親しんでいた可能性があるといえよう。このような仮説を本論がうち立てるのは、バリモントの「超人」イメージがニーチェに影響を受けたものであるという事実は否めないまでも、「超人」の淵源が決してニーチェばかりでないというバリモントの言説を少しは信じてみたいという気持ちからに他ならない。続いてバリモントが『ファウスト』の一節をエピグラフに用いたのは、1895年に発表された『無限の中で』の「За пределы (限界の向こうへ)」と題する連作詩における、『ファウスト』の第1部第1幕にでてくる地霊の言葉である。「...Geburt unt Grab, / Ein ewiges Mee, / Ein weschelnd Weben, / Ein glühend Leben..² (誕生と奥津城をみとり、永遠の海をさすらい、綾なす糸を織りかわし、生命ありて燃えさかり³)」をバリモントは「Вечность движенья / Область моя; / Смерть и рожденье, / Ткань бытия⁴」と翻訳している。また、同詩集の別の連作詩『Между ночью и днём (夜と昼の狭間に)』には、同じく『ファウスト』の第2部第3幕のオイフェリオンの言葉「Immer höher muß ich steigen, / Immer weiter muß ich Schau'n

as Superman.

¹ V.Markov, *Kommentar zu den Dichtungen von K.D.Balмонт 1890-1909* (Böhlau,1988), p.44.

² *Ibid.* p.44.

³ 山下肇訳『ゲーテ全集』3, 潮出版社, 1992年, 23頁.

⁴ *Бальмонт К.Д. Полное собрание стихов.1-10. Т1. М.,1914. С.49.*

(もっともっと高くのぼらにや, もっとも広くみはらさにや)¹」から Immer weiter をエピグラフに使っていることが指摘²される。

実際にバリモントが『ファウスト』に親しんだことを伝記的な記述に根拠を求めるならば、バリモントの妻エカテリーナ・アンドレーヴァ・バリモントのつづった『回想』³では、2人の出会いからして、ゲーテの『ファウスト』が存在していたことが明らかにされる。エカテリーナとバリモントがはじめて出会ったのが、バリモントにフランス文学やニーチェについての手ほどきをしたウーソフ公爵宅のことであり、二人の愛の成就是、ウーソフに夢中であったエカテリーナの感情を奪い取ろうとするバリモントの熱愛によってはじまったとされる。

妻子もちで、歳も2倍も上であったウーソフの心がエカテリーナから離れていくに随って、エカテリーナは失意のどん底へと陥り、その心を引き上げるかのように、バリモントが手を差し出した格好になる。

2人の愛は文学談義から始まった。それも、2人の文学的な嗜好が非常に近かったことから始まったとされる。ゲーテの『ファウスト』、バイロンの『マンフレード』、ドストエフスキーの『罪と罰』、2人は共通のテーマに花が咲き、お互いの心が近づいていったことが述べられている。

また、同書に収められているパリにいるバリモントからエカテリーナへの手紙で、バリモントが『ファウスト』を原書で読んでいたことが明らかにされる⁴。

バリモントは、ゲーテの『ファウスト』を読んでいたばかりか、詩の翻訳もこころみていた。1908年サンクト・ペテルブルグで発刊された『異国の詩人たちから』⁵には、ドイツ語からゲーテ、ハイネ、レーナウを翻訳したものが収められ、ゲーテの詩「人間の限界 (Grenzen der Menschheit)」、「プロメテウス (Prometheus)」の翻訳が為され、1921年にベルリンで発刊された『世界の詩から』にその中でも、それらの詩「人間の限界」、「プロメテウス」の翻訳が収められている⁶。バリモントの「大地に選ばれし者」という随筆⁷をつづっているが、これがいわば、バリモントが唯一残したゲーテ論と言える。実はバリモントが

¹ 山下肇訳『ゲーテ全集』3, 298頁。

² V.Markov, *Op.cit.*, p.57.

³ *Андреева-Бальмонт Е.К. Воспоминания. М.,1996. С.306.*

⁴ Там же. С.306.

⁵ *Бальмонт К.Д. Из чужеземных поэтов. СПб.,1908.*

⁶ *Бальмонт К.Д. Белые зарницы. С.1-11.*

⁷ *Бальмонт К.Д. Избранное. Стихотворения. Переводы. Статьи. М.,1990. С.563-568.*

残した随筆集『山々の頂』のタイトルそのものさえバリモントがもつとも愛した詩から付けられている。それは、随筆「ロマン主義者たち」にも言及されているが、レールモントフが翻訳した次の詩であった。

Из Гёте

Горные вершины
Спят во тьме ночной;
Тихие долины
Полны свежей мглой;
Не пылит дорога,
Не дрожат листы...
Подожди немного,
Отдохнёшь и ты. ¹

この詩は、ゲーテの詩「旅人の夜の歌(Wandrer's Nachtlied)」の翻訳とされる。

Über allen Gipfeln	峰はみな
Ist Ruh,	しずもり
In allen Wipfeln	梢に
Spürest du	風の
Kaum einen Hauch;	そよぎなく
Die Vögelein schweigen im Walde.	鳥は森にふかく黙す
Warte nur, balde	待てしばし やがて
Ruhest du auch. ²	お前も憩えよう

ゲーテの詩は8つの詩行から成り立っており、第1詩行から第6詩行までが「峰」をはじめとして、「梢」、「風」、「小鳥」といった動植物、自然の描写を中心として描かれており、最後の2詩行において、それら自然の「休息」という動きに対応するかのようになり、「お前」に対しても「休息」を促している。ロマン主義的な自然と人間の対比が描かれているといっても良いであろう。この詩は1780年9月6日の作とされる。当時ゲーテが良く泊

¹ Лермонтов М.Ю. Собрание сочинений. Т.1. М.,1964. С.69.

² 生野幸吉・檜山哲彦編『ドイツ名詩選』岩波書店、1993年、29-31頁。

まったイルメナウ近郊キッケルハーンの山小屋の板壁に記されたもの、とされる。¹Überは「～の上に」を表わしている。allen (all の 複数 3 格) は Gipfel の同じく複数形 3 格である Gipfeln に連結しているが、「すべての峰の上に」という状況語をレールモントフは主格で翻訳したことになる。この「山々の頂き」が、バリモントの親しんだ詩人や芸術家たちについての評論集のタイトルに用いていることは先に述べたが、バリモントの他の作品の中にも随所にこの語が使われている。

また、バリモント自身が翻訳したゲーテの詩「プロメテウス」の一節「汝の天は、ゼウスよ、あいたいの雲をもて覆うがよい！あざみの首を刎ねる童子のごとく、汝の力は樅の木や峰峰にふるうがよい！(Bedecke deinen Himmel, Zeus, Mit Wolkendunst! / Und übe, Knaben gleich, / Der disteln Köpft, / An Eichen dich und Bergeshöhn!)」²においても、Bergeshöhnの訳語にレールモントフの用いた同じ語 Горные вершины を用いている。

「旅人の夜の歌」において、ゲーテは、詩的主人公である「私」に「峰」を遠くから眺めさせている。主人公が「峰」の上にいるわけではなく、「峰」を見上げるという意味において、見る主体者である「私」と見られる対象の「峰」との垂直的構造が浮かび上がる。それに対比して登場する梢、小鳥といった別の登場は、「峰」と平行的位置に存在しているかどうかは、決して定かではない。むしろ、主人公「私」が認識できる範囲内、つまり、主人公と平行的な位置関係に存在しているといっていいただろう。つまり、「私」は、垂直的に高い位置にいる「峰」を眺めては、そこに「静けさ」があるのを確認し、並行的な位置関係にある「梢」や「小鳥」の存在も休息しているのを知り、「お前」に憩いを促すのであった。

このゲーテの詩に非常に近い空間的構造をもったバリモントの詩が存在する。

Вершины <i>медленные строки</i>	峰 緩やかな行
Вершины белых гор	白い山々の峰が、
Под красным Солнцем светят.	赤い太陽の下で輝く。
Спроси вершины гор,	山々の峰に聞いてごらん、
Они тебе ответят.	彼らは君に答えるだろう。

¹ 同書、28 頁。

² 同書、23 頁。

Расскажут в тихий час
Багряного заката,
Что нет любви для нас,
Что к счастью нет возврата.

峰は静かな時に語るだろう、
赤紫色の夕焼けの時に、
私たちに愛はないことを、
幸せには戻れないことを。

Чем дальше ты идёшь,
Тем глубже тайный холод.
Всё—истина, всё—ложь,
Блажен лишь тот, кто молод.

君がもっと遠くに離れたならば、
秘められた冷氣もより深いものになるだろう。
すべてが真理で、すべてが偽り、
若い人のみが幸福なのだ。

Нам скупо светит день,
А ты так жаждешь света.
Мечтой свой дух одень,
В ином же жди привета.

私たちには太陽の輝きは少なすぎる、
でも君はそんなにも輝きを渴仰する。
自分の魂を夢で着飾って、
よそものが声をかけるのをまつがよい。

Чем дальше над землёй,
Тем легче хлопья снега,
С прозрачной полумглой
Слилась немая нега.

より高く地上の上を昇れば、
雪片も軽くなろう、
透き通った薄明かりに
物言わぬ安らぎが溶け合った。

В прозрачной полумгле
Ни мрака нет, ни света
Ты плакал на земле,
Когда-то, с кем-то, где-то.

透き通った薄明かりには
闇もなければ、光もない。
君は地上で泣いていた。
いつしか、誰かと、どこかで。

Пойм, один, теперь:
Нет ярче откровенья,
Как в сумраке потерь
Забвение мгновенья.

今こそ、一人、気づくが良い：
それ以上の啓示はないのであると、
失った薄暮のなかで
その瞬間を忘れるような。

Мгновение красоты
Бездонно по значенью,
В нём высшее, чем ты.
Служи предназначенью!

美の瞬間は
限りなく深い意味をもち、
その意味において、君よりも気高い。
さだめのままに生きるがいい！

Взойди на высоту,	高みへのぼれ,
Побудь как луч заката,	夕焼けの光線のようになれ。
Уйди за ту черту,	その線を越えたときには,
Откуда нет возврата! ¹	そこから戻ることは出来ないのだ!

この詩は 1900 年に発刊された『燃える建物』の中の最後の連作詩「無風(Безветрие)」に書かれている(この連作詩には詩人ゲーテを歌った詩も存在し、連作詩そのものがゲーテを念頭につくられたものかもしれない)。

この詩は 9 つの詩節からなっている。

1. 第 1 詩節においては、前半の 2 詩行が「白い山々の峰」(自然)を主語とする文で構成されるのに対して、後半の 2 詩行は詩人(人間)がある者(ここではまだ男か女かは明らかにされていない)に語りかける様子が示される。押韻が男性韻と女性韻の交差韻となっていることから、男と女の会話であることが暗示されている。

自然と人間の対比は、バリモントが好んだレールモントフ、またゲーテの作品にも見られるわけだが、自然を前半の 2 詩行、人間の描写を後半の 2 詩行とし、特定の人間を自然にたとえるような簡潔な対比の構図をここでとっているわけではない。

ここでは、主人公の「私」と女が「白い山々」を通じて会話をしている様子が示される。つまり、男である「私」は女に直接会話をすることができない。もっと言えば、その女性が「山々の峰」を見ているかどうかさえ、実はあきらかではないのだ。したがって、ここでは明らかに、自然である「白い山々の峰」とそれを見ている「私」の対比になっている。

2. 第 2 詩節において、「白い山々の峰」が女性の「君」に語る内容が示される。ここでも、「君」が「私」の近くに存在しているかどうかは、示されない。前半の 2 詩行は、第 1 詩節と同じように、自然が人間に対して語りかける動作を示しているが、後半の 2 詩行において語りかける意味内容が接続詞 Что 以下で示される。

接続詞以下は、無論実際に自然が語りかけるわけではなく、詩人が直感的に感じ取った内容である。つまり、自然が喋ったのではなく、私が思ったのであり、詩人は、自然がそのように喋ったのであることを見せかけているに過ぎない。

¹ Бальмонт К.Д. Горящие здания. М., 1900. С.199-200.

この内容で、男と女は現在愛し合っている仲ではなく、愛がすでに終わっていることが判明し、二人の関係は修復しがたい関係であることが示されるのである。

この詩節は山の静かな様子を描くゲエテの詩にあやかり「静かな時」というフレーズのみを借用しながらも、ゲエテの詩のはるかに発展させた自然と人間、男と女の恋物語にしてしまっているようである。

3. 第3詩節において、前半の2詩行の主語は、自然ではなく、別れてしまった「君」になる。ここにおいても、山の上をより遠くに歩く「君」の姿が実際に目に見えているわけではなく、それはあくまでも仮定の話にすぎないことが分かる。山を見ながら「私」は、山を歩く「君」の姿を想像しているに過ぎないのであって、またしても、「私」が山を見ながら、追憶に浸っているのが明らかになるのである。

後半の2詩行において、あたかも恋の結末を総括するような言説がなされる。「幸せなのは若い人だけ」との言葉は、具体的に「若い」誰かを指しているというよりは、自分たちが若かったときの幸せな時に思いを馳せているようにも思える。自分と歳が離れた女性に対する思いの現れなのかもしれない。

この詩節では、この前の詩節（第1詩節、第2詩節）が、前半の2詩行（自然）と後半の2詩行（人間）を構成していたのに対して、はじめてその逆転がなされ、前半の2詩行が人間の行為、後半の2詩行が自然の行為を示すのである。

4. 第4詩節において、前半の2詩行の昼の「輝き」と「君」が対比される。「私たちにとって」眩しすぎる日の光は、その女性が自分の年齢に相応でないことを意図しているかのようである。後半の2詩行において、別の男の陰が見え隠れする。

5. 第5詩節は、第3詩節と同じように前半の2詩行で「君」（人間）を主語とする文で構成され、後半の2詩行で自然を主語とする文で構成される。「山」をのぼる「君」についての夢想であることは、前詩節と変わりなくも、より仔細に自然の描写がなされる。「地面をより高く昇れば、雪片もらくである」。つまり、遠く離れゆく「君」の存在を「峰を昇る」という行為に喩えているとも言えよう。「快樂」や「憩い」を意味するこの *Hera* は *немая* との語結合で「やすらぎ」を意味するとも解釈できるが、より濃密な男女の関係をも想起させる語である。しかし、たとえそのように解釈したとしても、ここでは所詮空想の産物に過ぎない。むしろ、*Hera* と *Полумгла* が溶け合う様子が男性韻と女性韻の交差によって男女の「溶け合い」にうまく重ね合わされていることに着目してみたい。実際には、

男と女はこの詩において、「溶け合う」ばかりか離れていく。2度と結ぶばれることはない関係へと昇華する。Нега と Полумгла の溶け合う行為は、むしろ男女のけっしてあり得ることのない「溶け合い」とのコントラストを為しているに過ぎない。

6. 第6詩節は前半の2詩行が自然描写、後半の2詩行が「君」(人間)を主語とする文で構成される。Полумгла は夜明けや日没の薄明かりを意味する語であるが、詩全体の文脈から考え、日没の薄昏と考えるべきであろう。沈み行く太陽の光が照らされつつも、光も闇もないといったあいまいな表現は男と女の関係が先にも後にも進まないものであることを暗示するのであろう。「君」が泣く様子が示される。その対比は, на земле 「地上で」と山の上という空間的軸の対比と重ねあわせられ、「君」がもう手の届かぬ存在であることが示される。

7. そこで、「私」は自分に言い聞かせるのである。愛を失った薄暮れの中であって、その愛を忘れること以外に道は残されていないのであると。ここで、1人称であった「私」は一時的に2人称に代わり、「私」は「私」にたいして ты と呼びかけるのである。この箇所は、ゲーテの詩「山の上から(Vom berge in die see)」の次の一節を想起させる。「リリーよ、そなたをおもっていないければ／わたしはどんなに歓喜してこの眺望に見入ったことでしょう。／けれどリリーよ、そなたを思っていないければ、わたしが幸福に思う景色などあったでしょうか¹」(Wenn ich, liebe Lili, dich nicht liebte,/ Welche Wonne gäb' mir dieser Blick! Und doch, wenn ich, Lili, dich nicht liebte,/ Fänd' ich hier und fänd' ich dort mein Glück?²)。つまり、山の上にながら、彼女を思いながら、自然に見入る。彼女を思わなければ、自然にもっと見入ることができるのに、という気持ちが、彼女以上の幸福はない、という気持ちと入れ替わりながら「私」に現れるのだ。しかし、バリモントの詩において、「君」を思わずには入れないという気持ちそのものを振り切ることを自己の命題と定め、その決意の意思表示に山を見入るのである。

8. 「美の瞬間」についての思念が広がる。「君」が美しかったのではなく、「美の瞬間」そのものが「君」以上に美しいとの思念である。「私」はそう思い、彼女を忘れるよう努めるのだ。「さだめ」を「さだめ」として生きること、そう「私」は心に決め、山を見ているのである。

¹ 手塚富雄訳『世界の詩集 1 ゲーテ詩集』角川書店、1967年、100頁。

² Goethes Werke, B1 (München, 1989), 103p.

9. もはや、最後の詩節は、「私」自身に対する言葉以外の何ものでもない。「私」は山に登ることを決め、「君」を忘れることを決然と決めるのである。

この詩において、「私」が山を見るということは、自らの視覚が山の空間的高さに上り詰めると同様に、自らの内面的な高さに上り詰める、ということである。この空間的照応関係は、もう一方において、「戻ることはない」という時間軸に転化されるのである。空間的境界線を越えることは、時間的な境界線を越えることにもなろう。つまり、有限的空間を「見る」という行為が時間的超越を志すことになるのである。

ゲーテとバリモントの「見る」ということ

世界の空間的全体のうちに時間を見、時間を読みとる能力、裏返していえば、空間の内容物を、不動の背景としてでもすっかり出来合いの所与としてでもなしに、形成されつつある全体として、できごととして知覚する能力。それは、自然から始まって人間の習俗やイデー（諸々の抽象的概念をもふくむ）にまでいたるすべてのもののうちに時間の推移の徴候を読みとる能力である。時間は何よりもまず自然のなかに姿をあらわす。太陽の動き、星のうごき、鶏鳴、肌に感じられ眼に映ずる四季おりおりの徴候。これらすべては、人間の生活、風俗習慣、活動（労働）における相応の諸要因と不可分の関係にある。¹

バフチンは、ゲーテに視覚が並外れた意義をもつことをこう強調する。

本質的なものはすべて、見ることができるものなのであり、かつまた、見えるものでなければならぬ。見えないものはすべて本質的なものではない。ゲーテが視覚文化にひとかたならず重きをおき、視覚文化をどれほど深く広く理解していたかということは、周知のことである。眼および視覚についての理解の仕方において彼は、粗雑な感覚論からも狭い唯美主義からもひとしくかけはなれていた²

と。

バフチンはゲーテの「見ること」のもつ意味を、その空間的全体の内に時間の流れを読みとる力があることに見いだした。この具体例をバフチンは、『イタリア紀行』の中から挙げている。

われわれが山々をあるいは近くから、あるいは遠くから眺め、その山上が日光に照らされたり、

¹ 佐々木寛訳「ゲーテの作品における時間と空間」『ミハイル・バフチン全著作』第5巻、水声社、89頁。

² 同書、p.89を参照。

霧に包まれたり、嵐の雲に襲われたり、雨の飛沫に打たれたり、あるいは雪に覆われたりするのを見るときに、われわれはこれらの現象をすべて大気のせいにするのである。それはわれわれがこの眼をもって大気の運動や変化を明らかに見てとることが出来るからである。これに反して山々は、われわれの外的感覚に対してありのままの姿でじっと動かない。それゆえわれわれは山々を命亡き者とする。休息しているから活動しないのだと考える。ところが私はずっと前から、この大気中の変化は、実はその原因の多く山々の内部の静かな神秘的な作用によるものと思わざるを得ないのである。¹

ここでゲーテがいわんとしていることは、この地球という塊、しかも地盤の隆起した部分（山脈）が間断なく脈打つことによって、大気に影響を及ぼすというものである。バフチンによれば、この説が科学的にみて根拠薄弱であることは重要なことではない。ゲーテの「見る」という行為が独特の性質を持っていることが重要なのである。普通の観察者にとって、山はうごかざるものの権化である。しかし、山々はけっして命がないのではなく、ただじっとしているだけなのである。また、不活動ではなく、休息しているだけなのである。

Zum Sehen geboren,	見るために生まれ
Zum schauen bestellt.	見るのを勤めとし、
Dem Turme geschworen,	塔の守りをしておれば
Gefäll mir die Welt.	この世はまことにおもしろい。
Ich blick' in die Ferne,	遠くを眺め、
Ich seh' in der Näh'	近くを見て
Den Mond und die Sterne,	月を見て、星を見て
Den Wald und das Reh.	森を見て 鹿を見る。
So seh' ich in allen	すると万物のうちに
Die ewige Zier,	永遠の飾りが見え、
Und wie mir's gefallen,	すべてが私の気に入るように、
Gefall' ich auch mir.	私自身また私の気に入る
Ihr glücklichen Augen,	幸いな二つの眼よ
Was je ihr gesehen,	おまえが見てきたものは、
Es sei wie es wolle,	それが何にせよ
Es war doch so schön!	実に美しかった！

¹ 同書、95頁を参照。

ゲーテにとっての見ることは、それは遠くのものであれ、近くのものであれ、空間的有限に時間的な無限を見出すものであったのだ。ゲーテは更に「見ている」自分を客観視し、「見る」自分を気に入ると表現するのである。一方、バリモントは、「Око (瞳)」という詩の中で空間的有限を「見る」なかに「永遠」という時間的無限を見いだしている。

Я Око всеобъёмное. Во мне
Стесненья гор. Их тёмные уступы
Ведут в провал, где ключ журчит на дне.

私はすべてをつつむ瞳。私の中に、
山々も窮屈。その暗い窪みが
断崖へと連なり、断崖の底に泉が涌く…

Мой враг – предел. Мой взор уходит в Вечность.
Предметное – лишь вехи для меня,
И я смотрю, считая быстротечность.¹

私の敵は限界。私の眼差しは永遠へと去っていく。
眼に見えるものは、私にとっての道しるべでしかない、
そして、私は見る、俊敏な速度を数えながら…

バリモントの詩においては、見ることの喜びが「私」を永遠へと向かわせる。むしろ、この詩においては、詩人が本来見ているはずの「太陽」に「私」が成り代わっているのかもしれない。「見る」空間的な限界が時間的無限を志向する点において、ゲーテの「見る」行為に似ている。ただ、バリモントの場合、「瞳」(視界)に収められた自然の営み一つ一つが、泉のように沸きいずる詩の源泉となっていることが示される。つまり、視覚は聴覚へと共感的に移行するのである。

ゲーテにとっての「超人」とは？

ああ、これまでおれは、哲学から
法律学、さらに医学、
そのうえ無用の神学までも、

¹ Бальмонт К.Д. Избранные стихотворения и поэмы. München, 1975. С.515.

とことんねじり鉢巻きで勉強してきた。
それなのに、これこのとおり、あわれな間抜けのまんま、
さっぱり利口になっていないおれさまだ！
学士だ、博士だとまで肩書きをつけて、
はや十年がところ、さんざ
学生どもの鼻づらつかんでひきまわし、
上げたり下げたり、右や左にひん曲げたりしてきたが¹

けっきょくわかったのは、われわれ何一つすることができないということだけ！
これにはまったく心臓も破れそうだ。²

これは、言わずと知れた『ファウスト』の有名な冒頭の一節である。学びに学んだ挙げ句、たどり着いた結論は、自分は実は何も「知っていなかった」ということだった。「究めつくした」という有限と「何も知ることはできない」という無限。知れば知るほど知りつくすことが不可能であることを認識するところで『ファウスト』ははじまる。ファウスト博士はメフィストフェレスに魂を売り渡し、「若返らせること」(時間的有限への挑戦)、「自由に行き来できる」(空間的有限への挑戦)ことを望むのである、『ファウスト』という作品において描かれる「超人」は時間と空間の超越を可能なものにした人間の意味であることがここにおいて伺える。

大学者『ファウスト』にしてこの言葉。詩人であるだけでなく芸術家であったゲーテにしてこの言葉あり、との感を抱かずにはいられない。事実、彼は、「形態学、骨相学、鉱物学、地質学も同様彼の関心をひいた。古銭学、気象学を学び、哲学やイタリア絵画を研究した。興味を持って中国文学も目を通した。彼は「色彩」についても論文を書き『『色彩論』のこと一筆者]、ショペンハウワーにも感動を与えた」(バリモン)³。その彼が、この最晩年の労作にあって書き残したものはいったい何であったのか？ファウストは魔術にこり、地の霊を招き寄せる。

出てこい！ さあ、でてくるんだ。おれの生命と引きかえにでも！

¹ 山下肇訳『ゲーテ全集』3, 298頁。

² 同書, 19頁。

³ *Бальмонт К.Д.* Белые зарницы.С.8のバリモントのゲーテ論 ‘Избранник земли (Памяти Гёте)’ から。‘Морфология и остеология, минералогия, и геология одинаково привлекают его внимание. Он занимается нумизматикой и метеологией. Он изучает философию и итальянскую живопись, он с любопытством заглядывает в китайскую литературу, он пишет о красках работу, которая поражает Шопенгауэра’の箇所。

(書物をつかんで、地霊の呪文を荘重にとなえる。一瞬、赤みを帯びた焰がひらめき、地霊がそのなかに姿を現す)

地霊 誰だ、わしを呼んでいるのは。

ファウスト (顔をそむけて) 恐ろしい姿だ!

地霊 お前はわしを強引にひきよせて
いっかなわしの領分に吸いついて離れないが、
それで、どうするんだ

ファウスト うーむ、堪らぬ、とてもかなわん!

地霊 なんだ、お前は、ふうふういいながら、わしと対面してみたい、
わしの声聞き、わしの顔を見たい、と願っていたではないか、
お前のその切ない願いに動かされて、
ほらこのとおり、わしは来たのだぞ! その超人だというお前が、
なんとという惨めな恐怖につかまっているんだ! 魂の叫びはどこへいったんだ。¹

バリモントはニーチェ以前に「超人」なる語がゲーテによって使われていたと2度に渡って強調しているが、ゲーテが「超人」の語を使用した箇所は、『ファウスト』における上記の引用箇所と、『ウルフファウスト』における次の箇所である。

ファウスト ああ、お前の姿に耐えられぬ。

地の霊 お前は喘ぎながら、おれを目のあたりにしたい、
この声を聞き、この顔を見たいと願ったではないか。
その魂からの切望がおれを動かした。
これがおれだ! なんとみじめなおののきが
超人のお前をとらえていることか! お前の、魂の底から
おれを呼ぶさけびはどこへいった?²

上記の2つの引用箇所をニーチェに関心を寄せていたバリモントがおそらくめざとく発見していたに違いない。ここで、ゲーテの使用していた「超人」と、ニーチェの意図していた意味がけっして同一ではないことが問題とされよう。また、バリモントが使用した「超人」の語、または、「超人」を髣髴させる語の意味を考えた時に、それがどのような

¹ 山下肇訳『ゲーテ全集』3, 22頁。

² 山下肇訳『ゲーテ全集』3, 374頁。

共通点を持ち、相違点をもつかが問題となるであろう。

バリモントは、超人を髣髴させる語として、「超人」以外に、「полубог (半神)」、「чудовище (怪人)」、「титан (巨人)」、「нечеловек (非人間)」の語を使用している。実際、「超人」の先駆的存在として、「аккорды (協和音)」¹という詩の中では、ゲーテをその一人に加えている。

バリモントは、ゴヤ、ラファエロ、ダ・ヴィンチ、コエーリヨ、時間空間を越えた不滅の作品を残した詩人や芸術家に対してこの語を使っていた。または、ボードレー、レーモン・ド・ラ・ヴィグナール、ボードレー、レーモン・ド・ラ・ヴィグナールなど、バリモントがこよなく愛した詩人に対してもこの語を用いている。しかし、バリモントが、作品のもつ芸術的な価値が時空を越えることをもって、それらの作品を産んだ芸術家や詩人たちすべてにこの語を適用していたとすれば、それは、ニーチェの意図していた「超人」とはほど遠い姿にあるのではないか。むしろ、それらの詩人や芸術家たちのもつ、認識方法に対して、それが時空を超越していることをもって、バリモントは「超人」の称号を与えていたのではないかと思われる。事実、ゲーテは、「見る」という行為の中に、バフチンが指摘するように、時空を超越していた。正確に言えば、限られた「見る」空間の中に継起的な時間の流れを見いだしていた、ということになるのである。

しかし、ゲーテの世界観をその「超人」イメージという限定的な意味で推し量ること自体がそもそもの間違いなのかもしれない。ただ、ある意味において、ゲーテが、ニーチェの『ツァラトゥストラ』が「永劫回帰」を覚知したそれよりも以前に、「永劫回帰」という考えかたに非常に近い死生観を有するに至っていたのは事実ではないだろうか。

エッカーマン著の『ゲーテとの対話』の中では、75歳のゲーテが「太陽」を見ながら呟いた言葉が記されている。

私たちは、そのあいだに、ヴェービヒトの森を一まわりし、ティーフルトの近くで道を折れて、ヴァイマルへ戻りはじめたが、そこで、沈んでいく太陽を見た。ゲーテは、しばし物思いに耽っていたが、やがて、私に向かって、ある古代人の言葉を口ずさんだ。

沈みゆけど、日輪はつねにかわらじ。

「75歳にもなると」と彼は、たいへん朗らかに語りつづけた、「ときには、死について考えてみないわけにいかない。死を考へても、私は泰然自若としていられる。なぜなら、われわれの精神は、絶対に滅びることのない存在であり、永遠から永遠にむかってたえず活動していくものだとかたく確信しているからだ。それは、太陽と似ており、太陽も、地上にいるわれわれの目には、沈んでいくように見えても、実は、けっして沈むことなく、いつも輝きつづけてい

¹ К.Д.Бальмонт. Полное собрание стихов.1-10.Т.1.С.203.

るのだからね。」¹

太陽を見ながらのこのつぶやき、太陽が「永遠の生命」の象徴としてこの言説にこめられた考えは、バリモントの代表作『太陽のようになろう』の冒頭の詩と共通する部分である。

Я в этот мир пришёл, чтобы видеть Солнце,
А если день погас,
Я буду петь... Я буду петь о Солнце
В предсмертный час!

私がこの世に来たのは、太陽を見るため、
しかし、日が沈んだならば、

私は歌おう... 太陽について歌おう。
死を前にした時まで!

Будем как Солнце! Забудем о том,
Кто нас ведёт позолотому,
Будем лишь помнить, что вечно к иному,
К новому, к сильному, к доброму, к злему,
Ярко стремимся мы в сне золотом.
Будем молиться всегда неземному
В нашем хотенье земном!

太陽のようになろう！ 忘れよう
誰が黄金の道を私たちに案内してくれるかについては、
ただ覚えておこう、永遠に異なるものへ、
新しいものへ、力強きものへ、善良なものへ、悪いものへと、
輝きながら、黄金の夢の中で進んでいくことを。
絶えず地上のものでないものに対して祈ろう、
私たちが地上で欲する中であって！

¹ エッカーマン著、山下肇訳『ゲーテとの対話』上、岩波文庫、1968年、145頁。

Будем, как Солнце всегда – молодое,
Нежно ласкать огневые цветы,
Воздух прозрачный и всё золотое.
Счастлив ты? Будь же счастивее вдвое,
Будь воплощением внезапной мечты!
Только не медлить в недвижимом покое,
Дальше, ещё до заветной черты,
Дальше, нас манит число роковое
В вечность, где новые вспыхнут цветы.
Будем как Солнце, оно -- молодое.
В этом завет красоты! ¹

いつも、若々しい、太陽のようになろう、
やさしく炎の花を愛撫しよう、
透き通った空気を、黄金のすべてのものを。
君は幸せなのかい？それならばその倍以上幸福になるがいい、
突如として現れる夢の具現者たれ！
ただ動きのないやすらぎのなかにあっても速度をゆるめないで、
もっと遠く、さらに、秘密の境界線まで至るまでは、
もっと遠く、運命の日が私たちに誘う
永遠という、新しい花々が発光する場所に至るまでは。
太陽のようになろう、それは若い。
そこにこそ、美しさの秘密があるんだ！

ここにでてくる「黄金の夢」については、レールモントフも「И на шелковые ресницы / Сны золотые навевать」、クーロチキンも「Честь безумцу, который навевает / Человечеству сон золотой」と歌っているが、これらの Золотой сон の淵源も実はゲーテの詩の一節、「Wed du, Traum, so gold du bist. (夢よ、汝はなんと黄金色なのか)」から来ている、との指摘²が為されている。

太陽になぞらえて「永遠の生命」をほのめかすこの詩を『ゲーテとの対話』から着想し

¹ Бальмонт К.Д. Будем как Солнце. Книга символов. М., 1903. С.1-2.

² V.Markov. *Op.cit.*, p.141.

たのかどうかについてはさだかではないが、「ゲーテ論」¹から推察するに、バリモントがこの『ゲーテとの対話』を読んでいたことは明白である。

結びに

以上、バリモントの作品における「超人」イメージのゲーテとの関連について、1.バリモントにとっての「ゲーテ」、2.ゲーテとバリモントの「見る」ということ、3.ゲーテにとっての「超人」とは、の3つの観点から論じてみた。

バリモントが言及を繰り返したように、確かにゲーテはニーチェ以前に「超人(Übermensch)」を使用していた。しかし、それは、代表作『ファウスト』におけるフレーズに過ぎず、ゲーテがニーチェの意図していた意味で「超人」の語を使用したとは言いがたい、それゆえ、ゲーテの「超人」が、ニーチェの思想の全てを代弁しているというのは、間違いであろう。

しかしながら、バリモントは、ニーチェの作品に親しむ前にゲーテの作品を読み深め、ニーチェが「超人」や「永劫回帰」なる語を駆使して言わんとした思想の片鱗が、すでにゲーテの作品に見られる自然観、世界観の中に見出せると考えた、と帰結したのではないだろうか。つまり、バリモントが「超人」について、それがそもそもニーチェ以前から使用されていたと、強調する理由の一つとして、通常の時空認識を超越し、生命の流転を自覚したニーチェ的「超人」に近い世界観はすでに、ゲーテによってすでに確立されていたとの考えを、バリモントが有していたといえるであろう。

¹ ‘Его трудовая жизнь была непрекращающимся праздником, и когда восьмидесяти двух лет он умер, — не умер, а безболезненно уснул, — Эккерман, стоя у смертного орда его, любовался его почти столетним телом, прекрасным и правильным, как статуя, без малейшего утолщения, без малейшего исхудания. Так умирали в древности, так будут умирать в будущем, оглядываясь на завершенность пути и не терзаясь ни страхом, ни раскаянием.’ *Бальмонт К.Д. Белые зарницы*. С.6. この描写は、エッカーマン著『ゲーテとの対話』の次の箇所を読んで書かれたものであることが伺える。「ゲーテの詩の翌日、私は、彼の亡骸をもう一目みたいという憧憬に強くかられた。彼の忠実な従僕フリードリヒが、彼の安置されている部屋を開けてくれた。仰向けに、彼はまるで眠れる人のように横たわっていた。その荘厳で高貴な顔容には、深いやすらぎと落ちつきがただよっていた。いかめしい顔にはまだ思想が宿っているようにもみえた。私は彼の髪を一房ほしいと思ったが、畏敬の念にけおされて、とうとう切りとることが出来なかった…」。『ゲーテとの対話』中、314-315頁。

Сравнительная поэтика — Гёте и Бальмонт—

«видение» и «сверхчеловек»

САГАЭ Мицунори

Бальмонт не раз отмечал в своих очерках, что само слово «сверхчеловек» употреблялось еще до Ницше романтиками и Гёте. Одновременно образ сверхчеловека в произведениях Бальмонта традиционно толковался в соответствии с ницшеанским пониманием «сверхчеловека», и до сих пор, не существует ни одной работы, разясняющей общие черты в мировоззрениях творчества между Бальмонтом и Гёте.

Бальмонт отмечал, что с детства любил стихи «Из Гёте» Лермонтова. Это – стихи, оригиналом текста которых является «Wandrer's Nachtlied» Гёте, переведённые на русский язык Лермонтовым. В этих стихах Бальмонту больше всего нравилось выражение «Горные вершины». Он даже употребил эти слова, как мотив в своем сочинении, и как название своего очерка.

В своём творчестве он употреблял слова «Горные вершины» для того, чтобы выразить гениальность и талантливость своих любимых художников и поэтов. Особенно таких художников и поэтов, которые не только имеют гениальные выразительные силы, а постигли беспредельное познание в своём сознании, Бальмонт назвал сверхлюдьми, (на самом деле, он употребил несколько слов, как нечеловек, чудовище, полубоги и т.д.) и, прежде всего, он не прямо назвал Гёте «сверхчеловеком» в своих стихах.

А как же Гёте постиг своё беспредельное познание в своём сознании? По словам Бахтина, в гётевской поэтике из пяти чувств «видение» всегда имеет превосходство. Когда он смотрел то на камни и пески, то на горы, он всегда находил временную безграничность в ограниченности пространства. И такое стремление найти безграничность в границах своего сознания, можно применить к «видению» в творчестве Бальмонта.

В каком же смысле Гёте употреблял «Übermensch»? Мы можем заметить, что в начальной части «Фауста» Гёте употребил «Übermensch» в словах Духа земли. Здесь упоминается «сверхчеловек», как существо, произвольно пересекающее временную и пространственную границу. То есть, Гёте не употребил слова «Übermensch» в том же самом смысле ницшеанского «сверхчеловека». Тем не менее, это не отрицает, что Гётевское

мировоззрение предшествовало ницшеанскому «вечному возвращению».

Когда читаешь любимые Бальмонтом мемуары Эккермана «разговоры с Гёте», можно увидеть, что Гёте смотрел на Солнце, как на символ бессмертия и сравнивал круговращение «солнца» с жизнью и смертью человека. Такую символизацию «Солнца», намекающую на ницшеанское «вечное возвращение» можно найти и в стихах «Будем как Солнце». И мы понимаем, что Бальмонт изучил поэтику Гёте, раньше чем, он занимался ницшеанской философией, и именно поэтому он узнал, что уже существует подходящая мысль к ницшеанскому «сверхчеловеку» в поэтике Гёте, и не прямо назвал его сверхчеловеком. И наверно, именно по этой причине Бальмонт сказал, что сверхчеловеческая идея – не оригинальная мысль Ницше.